

CL寓話

The Mango Tree/マンゴーの木

David K.Reynolds 著 本多岩夫訳

“Water Bears No Scars” -The Mango Tree- p134


かつて、そこには熱帯の陽光を浴びて大きく育ったマンゴーの木があった。その木は毎日灼熱に耐え、なおその下で休む人たちに木陰を提供していた。たくさんの実をつけたが、高すぎて手が届かない実もあった。一番高い所にある実はとてもおいしそうだったので、味をみたくて石を投げて打ち落とそうとする人もいた。鳥たちはその木に巣をかけた。猛烈な嵐でも巣が壊れることがなく安全だった+ので、鳥は自由に往来した。

やがてマンゴーの木は枯れた。それでも木の残骸は、いろんな生き物や家などの材料として使われた。生存している間、マンゴーの木そのままであり、マンゴーの木としてすることをしていただけである。味覚をそそる柑橘類や花の咲くチェリーの樹だったらなどとは望まなかった。自分に降りかかる暑さや嵐を受けとめ、そこに立ち、役立った。マンゴーの木にそれ以上何を求められようか？

◇著者コメント

私たちは他人に何をもちと期待出来ようか？

放置された砂糖キビ畑にマンゴーを採りに行った後で、私はこの話を書いた。キャンプ・セブンの古い作業小屋は、崩れ落ちていた。埃っぽい道路は惨めな状態であったが、マンゴーの木は何十年も前からそこにあったのと同じ状態で、そこに立っていた。かつてその農園で働いていた人たちも、また戻ってきてマンゴー採りを楽しんだ（半熟を採り、醤油をかけて食べた）。これらの頑丈なマンゴーの木々は、ただ自分の義務——放置され、孤独ではあるが、カウアイ島の猛暑や暴風雨にも耐え、果実をつけること——を果たし続けたのである。

 [目次へ戻る](#)